

グローバル・スタディーズ研究センター 2008年度プロジェクト

2008-1

2008年12月6日（土）開催

世界各地の食事情に学ぶフード・セキュリティの未来

このたび、静岡県立大学グローバル・スタディーズ・センター（CEGLOS）と大阪大学グローバル・コラボレーション・センター（GLOCOL）の共催で一般公開シンポジウム「世界各地の食事情に学ぶフード・セキュリティの未来」を下記要領にて開催いたします。ふるってご参加くださいますようお願いいたします。

宜しくお願い申し上げます。

記

静岡県立大学グローバル・スタディーズ研究センター、大阪大学グローバルコラボレーション・センター共催 一般公開シンポジウム in SHIZUOKA

世界各地の食事情に学ぶフード・セキュリティの未来

日時：2008年12月6日（土）13:00—18:00

会場：静岡県立大学小講堂

<http://www.u-shizuoka-ken.ac.jp/>

シンポジウムの趣旨（一般聴衆向け説明）

グローバル化によって南北間の貧富の差が拡大した現在の世界において、「フード・セキュリティ（食糧の確保）」は人類共通の重要な課題といえます。

フード・セキュリティが問題化される時は、国家レベルでの食糧安全保障に注目が集まり、世界各地の民衆が創り上げてきたフード・セキュリティに関する議論は、忘れられてしまいがちです。そこで、わたしたちは、「人間の安全保障」の考え方にしたがって、食糧についても、国家のセキュリティから人々のセキュリティに視点を移すことを試みます。

この一般公開シンポジウムは、静岡県立大学 CEGLOS と大阪大学 GLOCOL の2つの研究センターを中心として、開発学、人類学、国際法学、地域研究などの様々な分野の研究者が学際的に組織するものです。アメリカ（アラスカ）、カナダ、ブータン、ベトナム、イ

インドネシア、ロシア、フランス、ケニアなどの世界各地で暮らすごく普通の人々が、それぞれの地域社会のなかでどのようにフード・セキュリティを維持しようとしているのかということについて、最新の現地調査の成果に基づいて紹介します。そして、こうした草の根レベルの民衆知から学び、それらを比較することによって、世界各地の地域社会の食事情に根ざしたフード・セキュリティの未来を展望します。

当日は、大阪大学 GLOCOL・国立民族学博物館から総勢 6 名の研究者が来静し、海外調査に基づく最先端の研究に触れることができます。グローバリゼーション、セーフティ・ネット、フード・セキュリティ、貧困と飢餓、食文化、人間の安全保障、国際開発などに関心をお持ちの方のご来場を心よりお待ちしております。

パネリスト

上田晶子（大阪大学 GLOCOL 特任准教授・開発学）

住村欣範（大阪大学 GLOCOL 准教授・ベトナム地域研究）

ス・チンフ（大阪大学 GLOCOL 特任助教・生態人類学）

阿良田麻里子（国立民族学博物館外来研究員・インドネシア地域研究）

湖中真哉（静岡県立大学准教授 CEGLOS 研究員・アフリカ地域研究）

中川理（大阪大学 GLOCOL 特任講師・経済人類学）

岸上伸啓（国立民族学博物館先端人類科学研究部教授・北米先住民研究）

ディスカッサント・座長

玉置泰明（静岡県立大学教授 CEGLOS 研究員・開発人類学）

伊藤一頼（静岡県立大学講師 CEGLOS 研究員・国際法学）

比留間洋一（静岡県立大学助教 CEGLOS 研究員・ベトナム地域研究）

プログラム

趣旨説明（13:00—13:20）

湖中真哉・上田晶子

第 1 部：日々の食からフード・セキュリティを考える

座長：玉置泰明発表 1（13:20—13:40） 上田晶子 トウガラシ消費大国ブータンの食事情—トウガラシの入手と消費

発表 2（13:40—14:00） 住村欣範 家の木、庭の葉—ベトナム農村の家庭における薬と食

発表 3（14:00—14:20） 思沁夫 ロシア人の生きる戦略—経済移行期におけるダーチャの役割

発表 4（14:20—14:40） 阿良田麻里子 灯油かガスか、薪のかまどか—インドネシアの燃料事情

休憩（14:40—15:00）

第2部：国境を越えたフード・セキュリティの問題

座長：伊藤一頼

発表5（15:00—15:20） 湖中真哉 ケニア国内避難民の救援食糧と地域セーフティ・ネット

発表6（15:20—15:40） 中川理 フランス・プロヴァンス地方の農と食—危機と新しい動き

発表7（15:40—16:00） 岸上伸啓 アラスカ先住民社会における地球温暖化や国際規制による食糧問題

休憩（16:00—16:20）

第3部 パネルディスカッション座長：比留間洋一

ディスカッサント1（16:20—16:35） 玉置泰明

ディスカッサント2（16:35—16:50） 伊藤一頼

パネリスト応答・総合討論（16:50—18:00）

入場無料・聴講自由・事前予約不要（先着200名様まで着席可能）

お問い合わせ先

〒422-8526 静岡市駿河区谷田52-1

静岡県立大学国際関係学部

湖中 真哉

以上

静岡県立大学グローバル・スタディーズ研究センター + 大阪大学グローバルコラボレーション・センター共催
一般公開シンポジウム in SHIZUOKA

CEGLOS + GLOCOL OPEN JOINT SYMPOSIUM

世界各地の食事情に学ぶ
フード・セキュリティの未来



Bhutan

Vietnam

Russia

Indonesia

Kenya

France

Alaska

日時：2008年12月6日 会場：静岡県立大学小講堂



フライヤーデザイン：倉田真衣

CEGLOS + GLOCOL OPEN JOINT SYMPOSIUM

世界各国の食事情に学ぶ

フード・セキュリティの未来

静岡県立大学グローバル・スタディーズ研究センター + 大阪大学グローバルコラボレーション・センター共催
一般公開シンポジウム in SHIZUOKA

グローバリゼーションによって南北間の貧富の差が拡大した現在の世界において、「フード・セキュリティ（食糧の確保）」は人類共通の重要な課題といえます。

フード・セキュリティが問題化される時は、国家レベルでの食糧安全保障に注目が集まり、世界各地の民衆が創り上げてきたフード・セキュリティに関する議論は、忘れられてしまいがちです。そこで、わたしたちは、「人間の安全保障」の考え方にしたがって、食糧についても、国家のセキュリティから人々のセキュリティに視点を移すことを試みます。

この一般公開シンポジウムは、静岡県立大学CEGLOSと大阪大学GLOCOLの2つの研究センターを中心として、開発学、人類学、国際法学、地域研究などの様々な分野の研究者が学際的に組織するものです。アメリカ（アラスカ）、カナダ、ブータン、ベトナム、インドネシア、ロシア、フランス、ケニアなどの世界各地で暮らすごく普通の人々が、それぞれの地域社会のなかでどのようにフード・セキュリティを維持しようとしているのかということについて、最新の現地調査の成果に基づいて紹介します。そして、こうした草の根レベルの民衆知から学び、それらを比較することによって、世界各地の地域社会の食事情に根ざしたフード・セキュリティの未来を展望します。

当日は、大阪大学GLOCOL・国立民族学博物館から総勢6名の研究者が来静し、海外調査に基づく最先端の研究に触れることができます。グローバリゼーション、セーフティ・ネット、フード・セキュリティ、貧困と飢餓、食文化、人間の安全保障、国際開発などに関心をお持ちの方のご来場を心よりお待ちしております。



—パネリスト—

上田晶子（大阪大学） トウガラシ消費大国ブータンの食事情—トウガラシの入手と消費

住村欣範（大阪大学） 家の木、庭の葉—ベトナム農村の家庭における葉と食

ス・チンフ（大阪大学） ロシア人の生きる戦略—経済移行期におけるダーチャの役割

阿良田麻里子（国立民族学博物館） 灯油かガスか、薪のかまどか—インドネシアの燃料事情

湖中真哉（静岡県立大学） ケニア国内避難民の救援食糧と地域セーフティ・ネット

中川理（大阪大学） フランス・プロヴァンス地方の農と食—危機と新しい動き

岸上伸啓（国立民族学博物館） アラスカ先住民族社会における地球温暖化や国際規制における食糧問題

—ディスカッサント・座長—

玉置泰明（静岡県立大学）

伊藤一頼（静岡県立大学）

比留間洋一（静岡県立大学）



日時：2008年12月6日（土） 13:00～18:00

会場：静岡県立大学小講堂

入場無料・聴講自由・事前予約不要（先着200名様まで着席可能）

お問い合わせ先

〒422-8526 静岡市駿河区谷田 52-1 静岡県立大学国際関係学部 湖中真哉

E-MAIL: maaculture@gmail.com

CEGLOS + GLOCOL OPEN JOINT SYMPOSIUM

静岡県立大学グローバル・スタディーズ研究センター+大阪大学グローバルコラボレーション・センター共催
一般公開シンポジウム in SHIZUOKA



世界各地の食事情に学ぶ

フード・セキュリティの未来

Bhutan

VIETNAM

Indonesia

Russia

KENYA

FRANCE

Alaska



◆パネリスト◆

- 上田晶子 (大阪大学)
トウガラシ消費大国ブータンの食事情—トウガラシの入手と消費
- 住村欣範 (大阪大学)
家の木、庭の葉—ベトナム農村の家庭における葉と食
- 思沁夫 (大阪大学)
ロシア人の生きる戦略—経済移行期におけるダーチャの役割
- 阿良田麻里子 (国立民族学博物館)
灯油かガスか、薪のかまとか—インドネシアの燃料事情
- 湖中真哉 (静岡県立大学)
ケニア国内避難民の救援食料と地域セーフティ・ネット
- 中川理 (大阪大学)
フランス・プロヴァンス地方の農と食—危機と新しい動き
- 岸上野啓 (国立民族学博物館)
アラスカ先住民社会における地球温暖化や国際規制による食糧問題

◆ディスカッサント・座長◆

- 玉置泰章 (静岡県立大学)
- 伊藤一頼 (静岡県立大学)
- 比留間洋一 (静岡県立大学)

◆入場無料◆

◆聴講自由◆

◆事前予約不要◆

(先着200名様まで着席可能)

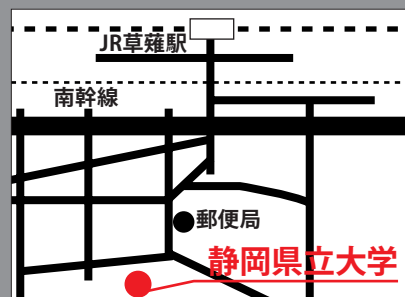
◆日時◆

2008年12月6日(土)

13:00~18:00

◆会場◆

静岡県立大学小講堂



◆お問い合わせ先◆

〒422-8526
静岡市駿河区谷田 52-1
静岡県立大学国際関係学部
湖中真哉
E-MAIL: maaculture@gmail.com

2008-2

2009年2月20日(金)開催

情報バリアフリーを目指して～社会企業ベンチャーの挑戦～

このたび、「情報バリアフリーを目指して～社会企業ベンチャーの挑戦～」というテーマで一般公開シンポジウムを開催します。講師として米国より Benetech 代表のジム・フラクターマン氏と DAISY コンソーシアム会長の河村宏氏をお招きし、ビジネスや経営のスキルを生かして誰もが情報を得られる社会をめざす社会企業ベンチャーの活動を報告します。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

「情報バリアフリーを目指して～社会企業ベンチャーの挑戦～」

日時：2009年2月20日(金) 13:30-17:00

会場：静岡県立大学 看護学部棟 13411 教室

シンポジウムの概要：；

今回のシンポジウムでは、「情報バリアフリー」と「社会企業」について、皆さんと一緒に考える機会を持ちたいと思います。

年齢、住んでいる場所、障害の有無に関係なく、だれもが情報を共有できるように配慮することを「情報バリアフリー」といいます。現在、グローバル社会の急速な発展により、私たちは求める情報をいつでもどこでも得ることができるようになりました。にもかかわらず、情報は世界中の人に平等に行き届いていません。情報は文字、映像、音声、などとしてインターネット、本、雑誌、新聞、テレビ、などの媒体を通して人々に提供されています。しかし、インターネットなどの道具を使える環境にない、新しい技術が使えない、電子データやオーディオブックがなければ出版された本を読むことができない、字幕がなければテレビや映画を楽しむことができない、といった人たちは、自分たちも平等に情報を得たいと望んでいます。今回私たちはその壁を取り除こうと活動している社会企業の取り組みに注目しました。

「社会企業」とは、望ましい社会についてのビジョンを描き、自分のミッションを掲げ、社会に貢献しようとする企業や非営利団体のことです。

シンポジウムでは、視覚に障害のある人や身体に障害がある人、読字障害や学習障害のために印刷物を読むことができない人でも本を読むことができる、という新しい技術－電子図書、マルチメディア図書－を用いて社会に貢献しようとしている社会企業のリーダーにこれまでの活動を報告していただくとともに、未来への展望や戦略も語っていただきます。

このシンポジウムを通して、情報格差という問題に関して私たちはどう対応していけば

いいのか、何ができるのかを一緒に考えていきたいと思います。

当日は「Bookshare」というインターネット上の図書館を運営する米国の Benetech 社の社長、ジム・フラクターマン氏と、デジタル録音図書を世界に広める取り組みをしておられる DAISY コンソーシアム会長である河村宏氏という、世界的な社会起業家お二方を講師としてお迎えし、講演していただくとともに参加者の皆様と一緒に様々な意見を交換し深め合うシンポジウムにしたいと考えています。

講師：

Jim Fruchterman (ジム・フラクターマン) 氏 (Benetech 社長)

河村宏氏 (Daisy コンソーシアム会長)

プログラム：

13:30-13:40 開会の挨拶

13:40-14:30 Jim Fruchterman 氏講演

14:30-15:20 河村宏氏講演

15:20-15:40 休憩

15:40-17:00 パネルディスカッション

主催：

静岡県立大学国際関係学部石川准研究室

共催：

財団法人長寿科学振興財団

グローバルスタディーズ研究センター

バリアフリーリソースセンター

入場無料・聴講自由・事前予約不要 (先着 200 名様まで着席可能)

***尚、当日会場には駐車場がありません。公共機関をご利用ください。**

***会場までの介添えが必要な方はお問い合わせください。**

お問い合わせ先

〒422-8526 静岡市駿河区谷田 52-1

(054)264-5325 (担当：山下)

yamashita@sheep.u-shizuoka-ken.ac.jp

静岡県立大学国際関係学部

石川 准

関連リンク

Bookshare.org

<http://www.bookshare.org/web/Welcome.html>

DAISY Consortium

<http://www.daisy.org/>

2008-3

2009年3月20日（金）開催

シンポジウム「博物館から発信する先住民族の人権」

シンポジウム「博物館から発信する先住民族の人権」～アイヌモシリ・チュウベツ（北海道旭川市）の先住民博物館から考える～

静岡県立大学国際関係学研究科附属グローバル・スタディーズ研究センター共催

日時 2009年3月20日（金）13:15開始（13:00から受付）

場所 静岡県コンベンション・アーツ・センター『グランシップ』映像ホール（2F）

スケジュール 講師による講演（13:15～14:45）、シンポジウム（15:00～16:30）

講師 川村兼一氏（川村カ子トアイヌ記念館 館長）

鹿田川見（旭川市博物館 学芸員）

塚田高哉（アイヌチセ保存会 事務局長）

コーディネーター 藤巻光浩（静岡県立大学国際関係学部准教授）

交通アクセス JR東静岡駅南口から徒歩3分（<http://www.granship.or.jp/>）

問い合わせ 「博物館から発信する先住民族の人権」シンポ事務局
（ainusympo320@yahoo.co.jp）

概要

近代博物館（美術館や科学館も含むミュージアム）は先住民族と深い関係がある。自然科学館においては、先住民族は「未発達」段階にあるものとして先住民族は展示され、歴史博物館においては、過去の存在として滅亡した民族として展示された。また、先住民族は、美術史のなかに取り込まれるかたちで、あくまでも同化の対象として位置づけられてきた。

このように「辺境」に配置されることになった先住民族であるが、ミュージアムにとっては必要不可欠の存在であった。なぜなら、ミュージアムの紡ぎあげる物語にとって重要な歴史観や文明観、そして美の基準などを図る上で先住民族の工芸などとの比較はなくてはならないものであった。19世紀から20世紀にかけては、ミュージアムが意欲的に先住民族の様々な物品を収集し、ミュージアムそのものの存在意義のみならず、国民国家に不可欠な世界観を生み出してきたのである。それにも関わらず、ミュージアムは、上記のように先住民族を「辺境」に配置したのであった。

日本では、1997年に「アイヌ文化振興法」が「旧土人保護法」に変わり、先住民族の文化振興が行われるようになった。また、2007年9月に、国連総会で所謂「先住民族の権利宣言」が採択され、それを受ける形で、2008年6月に日本の国会でアイヌ民族を先住民族とする決議が採択された。現在、先住民族に関する権利が、まだ眼には見えるものにはなっ

ていないが、唱えられるようになった。この文脈の中で 2008 年 11 月に、北海道の旭川市博物館が展示をリニューアルさせ、「アイヌ民族博物館」として生まれ変わった。アイヌ民族の学芸員を擁し、地元のアイヌ民族の共同体との連携を密に行い展示内容のリニューアルを遂行したこの博物館は、従来の<制度>としての近代ミュージアムから、先住民族博物館へと脱皮した点において注目に値する。

今回は、旭川市博物館から学芸員の鹿田川見氏、旭川で先住民族記念館を運営する川村兼一・シンリツ・エオリパック・アイヌ氏、そして旭川でアイヌ民族伝統住居チセ再建プロジェクトを手掛けた塚田高哉氏を招き、議論を展開していただく予定である。